

龜谷  
行著

和漢脩身訓

二

和漢脩身訓卷二

龜谷行著

第一章

○人の天地ふ生る。父母の外。君恩もつとも大あり。

習是編

○君よ事るハ。親よ事るグ  
如く。官長よ事るハ。兄よ事  
る可如し。呂氏童蒙訓

○親よ事るハ孝ハ。君よ事  
つて忠とあり。兄よ事るの  
敬ハ。長よ事つて順とある。

故小忠臣ハ孝子の門又出  
づと云。熊澤孝經小解

○心を盡し。上よ奉むる。之  
を忠と謂ふ。書經疏

○君よ仕つてハ。忠を盡し。  
私を忘れ。我身を顧ること

勿き。貝原初學訓

### 第二章

○人の人よる。全く禮ふ在り。威儀あり。法度あまき。人必む之を尊敬童子習ひ。我車馬

○長者又道ふ遭ひ。我車馬

ふ乗らば。必む下りて。長者の過ぐるを待同上つ。

○長者問ふことあらば。對ふるふ實を以てし。敢て欺同上ま同上い同上つ同上な同上ら同上ば。

○長者教誡まるること有ら

バ。首を垂れて之を聴く。之を妄より自ら議論を爲す可ら

ズ。朱子童蒙須知

○徐行して長者小後る。之を弟と謂ひ。疾行して長者より先ぶつ。之を不弟と謂ふ。

孟子

○門戸を出入し。及び席に即き。飲食する。こと。必ず長者小後る。具原童子訓

朱文公



○耳を傾け。人の密事を聴くこと勿き。あがり目。人を見ること勿き。貝原五常訓

第三章

○年方小幼。血氣未壯。あらず。大人の教戒。依り。以

て徳性を養ひ成せ。童子童子習

○謙とハ。自ら卑下して。誇らざるあり。人小下りて。問ふことを好む。人の諫を聞きて。我が過を改む。以て智を開き。善小進む。大貝原大和俗訓

○矜といふ不こる也。自らは是  
として。人ふ求め以。才智日  
又長トて。不善愈進む。尤モ戒  
むカ。同上  
○恕といふ。我が心を推し。以  
て人の心をはうる也。我が

好む所ハ。人も之を好む。宜  
く人ニ施すカ。同上  
○己レの心を盡すを忠とす。  
己レを推志。人ニ及スを恕と  
為シ。朱子語  
○信ハ。心ニ又レ海ことある也。

心誠何きべ。言行の上りあら  
らえらる。五常訓

○人の心信實あるは。萬事  
の基ふして。人よ交る能道  
あり。同上

○若信あ々れば。萬事都て

偽りあり。人よ交りて。何如  
ぞ善まことを得ん。同上

○孝悌忠信は。身を立つる  
の大本。禮義廉耻は。己を行  
ふの先務あり。省心  
雜言

○善哉行ひて。人の知るこ



とを求めば之を陰徳と謂ふ。古人曰く陰徳ハ耳乃鳴グ如く。我ひとり知りて人知らばと。大和俗訓

○人の飢うるを救ひ人の病めるをよきけ人の害を

除き人の利益を興す。皆陰徳あり。同上

○人の善を譽め人の過をうくし。人の中を和らげ。妄ま人を怨まば。皆陰徳あり。

同上

○道を修め。橋を造り。故ち  
として。禽獸蟲魚を害せぬ。  
皆陰徳あり。同上  
○人を侮らば。人を妨げぬ。  
善を成らぬ。めて。惡をいさむ。  
之は陰徳あり。同上

### 第四章

○人の心を知りて後。交る  
處。知らば。志て。交まらば。悔  
ることあり。大和俗訓  
○人小交る。小は。厚きを本  
と爲。厚しとい。人を責めば

して。我を責むる也。同上

○己を責むれば。身脩り。人  
我責免ざれば。恨を招くと  
とあり。同上

○他人の長短を論ぜんと  
欲せば。先づ自己に長短如

何を願ふ。願體集

○善人を見て。之の效ひ。不  
善人を見て。之を改む。善と  
不善と。皆吾師あり。傳家寶

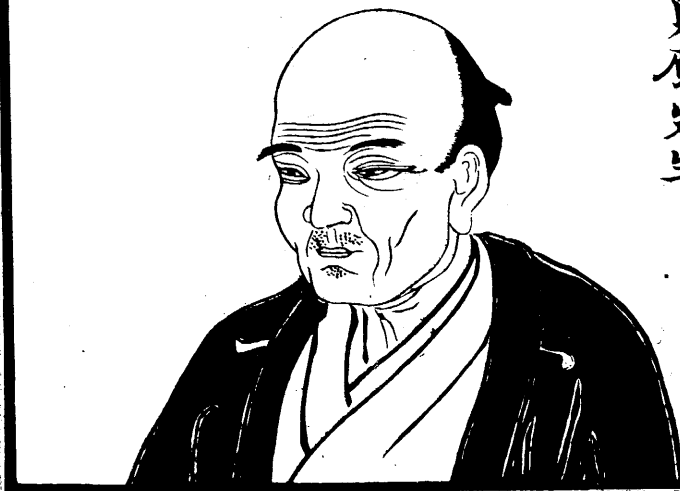
○人禮を失ふも。咎むる可  
らば。禮を知らざるの人の

狂人小同大和

貝原先生

訓俗

○凡ッ人小對せば。我が位と年とをりへりえ。又對する人の



位と年とを知り。其宜きふりあふハ。禮也。同上  
○人を敬ひて。節よ過よるハ。其過大あらば。我が位より傲まるハ。其過大あり。同上

第五章

○世又虚言多し。虚言を信  
じて。人ふ語まば。吾も亦虚  
言の責を免れぬ。大和俗訓  
○君子ハ。人の善を揚げて。  
人の惡を隠し。人の長を  
所を取り。短き所を言はば。

同上

○人の過ハ。吾が心ふ之を  
知るを。妄りふ口より出せ  
らば。同上  
○人を誹るハ不仁あり。且  
吾ふ於て益あり。人も之

を聞らば甚ど害あり。同上

○人を誚るハ第一の輕薄  
あり唯徳を失ふのみあら

ば亦我ら身を失ふ。瑜紳

○郷里人物の長短を論ず。  
鄙俚無益の談を為すこと

勿き。養正遺規

○凡、人と語るに彼をして  
其所長を説くむべし。我  
ふ於て益あり。佐藤一齋語

### 第六章

○朝と道を聞けむ。夕ふ死

口葉脩身川 卷三 十三 光風土蔵版

和漢傳身訓 卷三 十一 光原補注

すとも可あり。孔子語

○玉琢らざれば器を成さ

ば。人學ばざれば道をしら

ば。禮記

○志ある者ハ事竟ニ成る。

後漢光武帝語

○志を立つるの功ハ耻を

知るを以て要とす。佐藤一齋語

○千里の路も一歩より始

む。志を立てて道を學ぶ。

遂ハ遠大ニ至る處ナシ。大和俗訓

○萬の事。初めニ惜れば後

和漢傳身訓 卷三 十四 七風土歳反

又功あり。學問は於て尤モ然りといふ。同上

○書を觀ること一卷あき  
べ。一卷の益あり。書を觀る  
こと一日あきべ。一日の益  
あり。明倪文節語

○學ぶ者ハ。必ず師を求む。  
師を求むること。慎まげら  
べうらほ。宋程伊川語

○道を教ふるの師も。其恩  
尤重し。君父と同づく貴ぶ  
るべし。初學訓



○ 技藝の師も亦我小恩あり。敬重せざふづらば。同上

○ 良田萬頃も一藝の身小在ると如らば。願體集

第七章

○ 朝早く起くるは家の榮

ゆる兆あり。晩く起くふは。家に衰ふる基あり。

大和俗訓

○ 一日の飯を

喫せば。一日の



程伊川先生

飯錢を得る亦空を計る屋  
。必<sub>レ</sub>虚く費<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>勿<sub>レ</sub>き。

願體  
集

○家を保つ<sub>レ</sub>の道ハ。勤と儉  
と小あり。勤儉なきハ。財を  
失<sub>レ</sub>ハ。能く家を保つ<sub>レ</sub>屋<sub>レ</sub>。

貝原家  
道訓

○勤儉の工夫ハ。忍小あり。  
忍ハ耐ふる<sub>レ</sub>なり。勞苦<sub>レ</sub>又耐  
つて克く勤め。私慾を制<sub>レ</sub>。  
儉約を行ふ<sub>レ</sub>屋<sub>レ</sub>。同上  
○勞苦を樂<sub>レ</sub>。本業を營め

バ。其後衣食可からば餘り

あり。明倪正  
父語

○口腹を縦いまゝみし。逸

樂を事とみまば。其後衣食

必ズ足らば。同上

第八章

○過てハ。改むるふ憚ること

と勿き。孔子  
語

○過て改めざる。是を過と

謂ふ。同上

○小人の過也。必を文ざる。

子貢  
語

○人誰ら過あるらん。過て能く改めば善これより大あるはあし。左傳

○人其過を知らざるを患ふ。既よ之を知り改むること能はば是勇かき也。唐韓退之語

○過を改むるの人ハ。天氣の新小晴るゝお如し。我自ら快し。人之を見るも亦喜ぶべし。明陸桴亭語

仙洲均書

和漢脩身訓卷二終

明治十五年三月廿八日版權免許  
 同 年 五月四日出版  
 同 年 九月十八日再版御届  
 同 十七年七月七日三版御届

定價金七錢

東京府士族

光風社長

著者出版人

龜谷行



東京神田金澤町十番地

大阪備後町平野寺番地

中近堂支店

同 備後町平野寺番地

梅原龜七

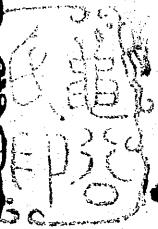
製本

發兌

稟准

東京光風社

明治十四年之冬以  
 復製本以此紙為証



龜谷  
行著  
和漢脩身訓  
三

K110.1  
37  
3